である。

寡婦年金に対する請求権

遺族年金は，家計補充機能の原則から，婦人が子どもの世話にかかりきりになっていなければならず，そのためになんらの収入も得られない場合にのみ支給されるものであるとみるべきであろう。しかし，遺族年金は，家計補充機能のみならず，夫婦によって得られた生活水準の維持のための，均衡機能をもつべきである。この従前の生活水準の維持ということは，遺族保護にとってきわめて必要なことである。したがって，将来固有の年金請求権をもつ婦人の場合でも，遺族年金に対する請求権はなくすべきでない。

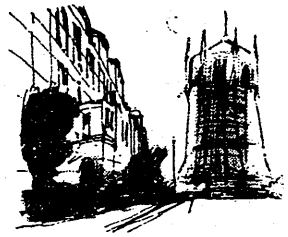
ところで，最近，主婦のために，廃疾の場合でも社会的保護が与えられるような，独自の災害保険をつくるべきであるという要求もなされている。この要求がリハビリテーション・サービスを問題にしているのであれば，年金保険によっても，これを満たすことができるが，そうではなく，公的災害保険を主婦にも拡大適用すべきであるという要求がなされているのである。子どもの世話に専念している主婦だけ，ここでも国家的保護のなかに組み入れられるべきである。その他の婦人については，私的保険でカバーできるようにすべきである。この場合，家庭にいて子どもの世話をしなければならないのに，働いている婦人は，子どもの世話に専念している婦人に比べて，損をするということになるので，このような職業と家事の二重の負担を背負っている婦人に対しては，この二重の負担を軽減，または，なくすような措置が講ぜられ，両者の均衡がはかられるようにすべきであろう。

A. Holler, Zur sozialen Sicherung der nichtberufstätigen Frau, *Soziale Sicherheit-Bundesrepublik Deutschland*, Februar 1969, ss. 33～36.

（石　本　忠　義　健保連）

疾病の社会的原因

（オーストリア）



われわれは，新しい時代の不安のまっただなかにいる。したがって，もしかりに，この新しい時代が医学ももたないということであれば，これはまさにたいへんなことである。われわれの歴史を通して，疾病の発生に，社会が及ぼす影響はきわめて大きい，ということは明らかである。新しい存在論的次元からすれば，人間の社会性は疾病との関係において理解されるべきである。この新しい考え方なるものは，孤立した人間を考え，人間そのものは自由であり，各自の意志によって生活をしているという古い考え方とは異なるものである。それは，認識論的な概念である。そこでは，共同社会は即社会であり，自律構造を有し，個人とそれを包括する社会とのあいだに作用がある組織である。

ところで，ここでは社会から個人への作用という1つの方向の作用だけを考えてみよう。いかなる社会でも，われわれが一般に倫理と呼ぶような規範をつくっている。この規範は，人間の諸行動を規制する。それは，飲食，喫煙まで規制し，人間の肉体的変化をもたらす。とくに食事については，社会は，一連の健康上の危険が生ずるほど人間の食習慣を規制する。それも合理的な規制でないからであり，したがって，社会のもろもろの影響が，どの程度個人に危険をもたらすかということは，きわめて重要なことである。この危険のよい例として，心筋梗塞と心臓病がある。

アメリカの調査では，心臓病について，危険の個人性という概念が引き出されている。たしかに社会的な影響を受ける疾病にも，ある程度の個人性は認められる。しかし，心臓病の社会性は，いろいろな研究からも明らかである。

今日の労働の世界をみると，さまざまな情勢を示しており，このような諸情勢が生物学的な強い影響を及ぼしている。実際，近代の労働生活においては，種々の要因がますます多くなってきている。このことによって，人間が以前より容易に退化してしまうように思われる。いまや花道を通り，脱線しないでいくことが，人間にとっては困難なようである。

このような社会情勢の変化においては，一般的な社会規範に適応する能力というものが大きな役割を果たす。しかし，今日は昔に比べ，規制された社会に適応するということが難しくなっている。増加する犯罪を原因として，社会規範の崩壊が考えられうるのみならず，個人と社会規範との間の激しい争いの増加によって，ノイローゼ発生の可能性もある。社会に対する個人の適応が乏しくなっている原因にはいろいろあり，激しい社会の変動から企業における昇進の機会の低下によって生ずる絶望感—それは，人間の精神生活にきわめて重大な意味をもつ—まで数多い。

しかし，このような考え方もはっきりした断定はむずかしい。とくに労働の世界における人間の状態を探究することは，非常に困難である。近代の労働の世界の，人間の肉体に対する影響を研究するためには，専門学者，労働コンサルタント，労働社会学者および労働医学者の力を借りる必要がある。いまのところ，現代において人間が，そのもとで生活し労働しなければならない諸条件に，どの程度適応しうるか，または，適応しているかを知る者はいない。とくに，どのようにして感情面の影響が，肉体的疾患に及ぼされるかについては，かいもくわかっていない。ホルモンやアドレナリンの働きがわかっていても，それらのはっきりした社会的肉体的作用については，ほとんど明らかでない。したがって，これらの点について今日分析すれば，きっと精神的肉体的影響の発生について，多くの価値ある手がかりが得られるにちがいない。通常，精神的な出来事の肉体への影響については，非常に低く評価されているきらいがある。急死にも至るこの種の影響についての報告は，ほとんどきわめて少ない証拠例として処理される。こうした状況からも，人間学をもっと拡充することが将来の課題である。

H. Schaefer, Die gesellschaftlichen Ursachen der Krankheit, *Soziale Sicherheit* (Österreich), August 1968, ss. 298～300.

（石　本　忠　義　健保連）